

東日本大震災直後の二〇一一年四月、当時勤務していた米国・ハーバード大学の同僚や学生たちとシンポジウムを開催した際、登壇者のマイケル・サンデル教授(哲学)は「この震災は世界の人々が民族や国籍を超えて、よりグローバルな倫理観、責任、共感を持つ始まりになるかもしれない」と言いました。そして

東北復興日記



▶▶▶ 198



星槎大学副学長

細田満和子さん



震災通じ地球規模の共感

人間の関心や共感の範囲が地球規模に広がり、コミュニケーションとしての意識を持つことを「グローバル・アイデンティティー」といい、震災を機にわれわれの社会がグローバル・シチズンシップに向かう可能性を予言しました。

この予言が現実となる場を、私は福島県の相馬地域でいくつも見てきました。一二年四月に南相馬市の仮設住宅を案内したボストンからの友人は、バアチャンたちが作った精巧で美しい折り紙やくす玉を見て「素晴らしい芸術」と感激しました。折り紙は四

週間後にボストンで開かれた日本祭り「写真」に出品。震災に思いを寄せる人々によって発売しました。

英国・エディンバラで公衆衛生を学ぶ大学院生は、ある日本人医師の講演で福島放射線による健康被害は自分が思っていたよりはるかに少ないことに驚き、一五年九月から一年間、南相馬に住み調査研究をしました。そして「福島最大の問題は放射線ではなく、ネガティブな地域イメージを持たれることで、それが人々の健康をむしろ損ねる」という結論に至り、帰国

後も得た知見を世界に伝える活動をしています。

これらは、相馬地域の課題や関心に国を超えて共感し解決しようとするグローバル・シチズンシップな営みといえます。今、南相馬のベテランママの会が主催するニットサークルのバアチャンたちは、来年のボストン日本祭りのバザーのための作品作りに励んでいます。海に向かっての復興への願いが届くように、また日本からの応答が伝わるように、書きつづり語り継ぎたいと思います。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。